多言語環境下で育つ児童の発達支援

多言語併用と障害との相互作用の視点から

企画・司会： 権藤桂子 （共立女子大学家政学部児童学科）
企　　画： 松井智子 （東京学芸大学国際教育センター）
話題提供者： 権藤桂子 （共立女子大学家政学部児童学科）
島田かおる （啓明学園初等学校国際学級）
近田由紀子 （大阪大学大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究科）
塘利枝子 （同志社女子大学現代社会学部現代こども学科）
指定討論者： 稲田素子 （立教大学）

[企画主旨]

近年、日本でも多言語環境で育つ児童数が増加しているが、それらの児童の発達を適切に評価し、多言語発達を支援する方法については研究が少ない。多言語環境で育つ発達障害児の存在も学校や療育の場で認知されているが、これらの児童の困難さが発達障害によるものか、多言語併用によるものかの判断が難しく支援の対象外となる場合も多い。また、発達障害と診断された場合、多言語併用は適切でないとして、１言語使用を勧められることが多いが、この事にも実証的根拠はなく、むしろ多言語併用によって認知能力の発達が促進されるという指摘もある。多言語併用児の発達をめぐっては研究や実践上の課題が整理されていない状況にある。ここでは、多言語環境下で育つ児童の発達支援について、多言語併用と障害との相互作用の視点から、今後の研究や実践上の課題を明確化したい。

「二言語環境下で育つ ASD 児の言語発達」（権藤）日英バイリンガル環境下で育つ７歳から９歳の高機能 ASD 児の言語発達について、語彙理解、文法理解を日英バイリンガル定型発達児と比較検討した結果を発表する。また、事例をもとに言語環境と言語発達について考察したい。

「『帰国児童』の現状　－その問題と手だて－　」（島田）近年、日本の学校を経験した後、再度海外から戻る純粋な「帰国子女」は少なく、幼児期から海外で育った日本人児童、国内外からの国際結婚家庭児童、日本で生まれ育った外国人児童、また、国内の英語幼稚園・学校からの日本人児童などが増加している。これらの子ども達は豊かな文化と言語生活を持つが、多言語併用のために思考言語が十分に育たないダブルリミテッド状態に陥るケースや、語彙・コミュニケーション能力の未成熟、更に発達障害を併せ持つ複雑なケースもある。幼児期に親の愛情と周囲とのやりとりの中でしっかりした言語を育てること、早期の問題への気づき、また、9 歳・10 歳の壁の前に「知的・精神的・身体的」各面から指導・療育することが重要である。

「小学校における外国人児童教育　～現場での教育実践から見える可能性～」（近田）通常私たちが子どもを指導する際、その子の実態をつかんだ上で適切な目標を設定し、学習活動に工夫を凝らしていく。外国人児童の場合、言語・文化的背景の違いはもとより、彼らが文化間を異動していること、第二言語習得の過程にあることが、日本人の子どもからは想像できないほど多様な要因を有し、指導を難しくしている。さらに外国人児童を受け入れる学校の環境、指導者の力量といった課題もある。幼児期に発達基盤はつくられることは周知されているが、小学校段階でも子どもは発達途中であり潜在的な力や可能性を大いに秘めている。小学校現場において、環境づくりと長期的な指導の積み重ねにより、外国人児童・保護者・学校全体が成長した実践例を紹介する。

「外国人児童・生徒の言語、対人関係、アイデンティティー」（塘）塘の発表では、多言語併用と障害の問題を対人関係やアイデンティティーの側面から考え、そこに発達的観点がどう絡まってくるかについて議論する。児童期や前青年期といった年齢では、言語習得が単に学校内での学習上の問題として重要であるだけではなく、友人関係やアイデンティティーを構築する際の手段としても重要となる。さらに障害を持っている子どもであれば、言語習得の程度のみならず、障害の程度も考慮する必要がある。本発表では年齢の異なる具体的な事例をもとに、学校と家庭において多言語併用を求められている障害児の支援について考察したい。